

トランス「伝染」誤った認識

和那那覇市議発言 性別不合学会・中塚理事長に聞く

参政党の和那那覇市議が、出生時の性別と性自認が異なるトランスジェンダーが「伝染する」など、差別や偏見を広げる発言をし、当事者や市民らが抗議の声を上げている。和那市発言の医学的根拠の有無や性別違和を抱える子どもたちのサポートについて、岡山大学教授で同大ジェンダークリニックで医師を務める日本性別不合学会理事長の中塚幹也さんに聞いた。

（聞き手・田吹通子）

「和那市議の一般質問でトランスジェンダーが『伝染する』との発言があった。医学的にどう受け止めたか。」

「トランスジェンダーが『伝染する』は医学的な根拠はなく、誤った認識だ。社会的な意味で使っているにしても『伝染』ではない。」

「実際、友達との会話などで性的マイノリティーに関する情報を知って、自分の性自認や性的指向が分かったという方はいる。それを表面だけ



岡山大学教授で日本G I（性別不合）学会理事長の中塚幹也さん（提供）

当事者の苦痛 社会に問題

「私たちのクリニックに來られている方を対象にした調査では、半数以上は就学前からというデータがある。」

「『性別同一性障害』という名称は『性別不合』に変わった。」

「世界保健機関（WHO）が2019年に了承した『国際疾病分類』改定版（ICD-11）では、性別同一性障害が『gender incongruence（性別不合）』に変更され、分類も『精神障害』から『性の健康に関連する状態』へ移された。性別不合は『病気』や『障害』ではないという考えが広まったためだ。学会も24年から『日本G I（性別不合）学会』に名称を変えた。実際に性別不合は、割り当てられた性と心の性が一致せずしんどい状況だ。社会が受け入れてないからこそ、しんどさがある。」

「アメリカでは、子どもたちが、性別適合手術まで進んで後悔したという事例があると、和那市議の質疑でも取り上げられていた。」

「日本ではあり得ない。子どもが性別違和感を訴えると、専門の医療施設につないで、まず

は困りごとから解消していく。二次性徴前の子どものホルモン治療や手術などをすることは絶対にない。胸の手術は日本のガイドラインでは成人からしかできない。」

和那市議は「配慮よりも心の傷を治療できる心理士が必要」と「治療」とも表現していた。

「心の傷が例えば（性的マイノリティーであることなど）いじめを受けたことなどによるものなら、当然サポートは必要。ただ、割り当てられた性に心の性を合わせるような治療をすべきという趣旨で言ったのなら、きかないし、するべきではない。逆に、そういう考え方が基で、鬱や自殺が増えてしまう。」

性別違和に悩む子どもにも、教育現場ではどう対応していくべきか。

「言い出しやすい先生になつてほしい。制服が選択制だったり、保健室にレインボーフラッグがあったり、性の多様性を尊重している雰囲気や学校として用意することも大事。少なくとも性的マイノリティーに関してネガティブな話はしないでほしい。こちらから決めてつけて問詰めることもやってはいけない。話してくれるのを待つことが大事だ。」